

2022年度  
入学試験問題  
( A 日程 )

国 語

注 意

- 1 「開始」の合図があるまで開いてはいけません。
- 2 「開始」の合図で、1/5から5/5まで問題が印刷されていることを確かめなさい。
- 3 解答用紙に受験番号を書きなさい。名前を書いてはいけません。
- 4 答えはすべて解答用紙の指定された解答欄に書きなさい。問題用紙に書いても得点になりません。
- 5 解答用紙はこの表紙の裏にあります。
- 6 「終了」の合図で、すぐに筆記用具を置きなさい。
- 7 問題および解答用紙は机の上に置き、持ち帰ってはいけません。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

言葉を尽くしても、その思いがなかなか伝わらない。という一方で、伝えようとしなくとも、結果として伝わってしまうこともある。この伝えようとして伝わらない、伝えようとしなくとも伝わってしまう、という二つの事態はどのようにして生じているのか。

このことを意識しはじめたのは、テニスのボールを打ちあう乱打と呼ばれる練習でのことであった。相手のコートから飛んでくるボールをケンメ<sup>1</sup>イに追いかけて、それをただ打ち返す。うまく返せればいいのだけれど、ラケットの面が馴染むまですこし時間もかかる。「あれれっ、ちよつと調子がでないぞ……」などと思いつつも、しばらくするとラリーもつづくようになり、楽しくなってくるのだ。

こうした状態になると、自らの調子だけでなく、相手の調子や気持ちまでも伝わってくる。「なかなか素直なんじゃないの……」とか、「ちよつとイラついているのかな……」とか。ただボールを打ちあうだけなのに、どうしてなのかと思う。相手から飛んでくるボールの物理的なスピードを測定しても、<sup>①</sup>そうした情報は得られない。いわゆるコードモデル<sup>\*</sup>で説明できるようなものではないのだろう。

会話のなかで、なにげなく言葉を交わすというのも、このテニスの乱打に近い感覚だろうか。そのやりとりを介して、相手の性格や気持ちもなんとなく伝わってくる。**X** 街の雑踏のなかで、すれちがいざまに感じることもある。ちよつとした相手のハイリヨ<sup>2</sup>に、その優しさや人柄までも伝わってくるのだ。

テニスのボールを打ちあう、なにげなく言葉を交わす、雑踏ですれちがう。こうした場面では、ふつう相手との〈対峙<sup>たいじ</sup>しあう関係〉を想定しやすい。けれども、一緒にボールのスピードを調整しあうという点では、ボールに対して二人は並んでいる。その会話の場やすれちがい場面に對しても、お互いは並んでいるといえるだろう。この〈並ぶ関係〉におけるコミュニケーションの様相について考えてみよう。

「伝えようとしなくとも、伝わってしまう」ことについて、もう一つ印象深い場面がある。新幹線のシートでのヒジの攻防と呼んでいるものである。週末を控えているためか、出張からの帰りにいつもの新幹線に乗り込んだら、生憎<sup>あいにく</sup>、空いていたのは三人掛けの真ん中のシート。お弁当を食べるにも、雑誌を広げるにも、なにかと両隣のヒジの位置が気にかかる。そんな思いをしたことはないだろうか。キョウクツ<sup>3</sup>さに耐えかね、わずかにヒジを広げようとすると、見知らぬ隣人の生温かい肌に触れ、思わずヒジを引いてしまう。このヒジの位置取りというのはなかなか難しいものだ。

相手の主張に対して強引に押し返そうものなら、自分の傲慢さを感じたまま、しばらくその状態を我慢しなければならぬ。相手を気づかうあまり、ヒジを縮めたままでも具合がよくない。押し返すべきなのか、ここはじつと耐えるべきなのか……。残された方略は、相手のわずかな隙を又ス<sup>4</sup>んでは、じわりじわりと領地を広げていくという地道な方法だろうか。

(中略)

そのヒジをツンツンと押しみると、〈相手〉も負けじとツンツンと押し返してくる。これは「その相手は何者なのか？」を特定するための知覚行為でもあるけれど、それだけにとどまらない。先にも登場した浜田寿美男先生によれば、「わたしたちの身体同士が出会うとき、必ずなんらかの形で志向のやりとりがなされることは、身体を持つものとしての人間のきわめて本質的な条件である」という。ヒジを押しあうという行為は、その相手をモノとして押ししているのではない。そのヒジを押しときに、同時に相手から押し返されることを感じとり、そのなかで、相手の主体性をも感じとっているという。

テニスコートで相手とボールを打ちあうのも、壁にボールをぶつけながら遊ぶのとはちがう。相手に自らの志向を向けつつ、同時に相手からこちらに向けられた志向をも感じとる。あるいはボールを相手に打ち返す際には、「それをきつと打ち返してくれるはず」と半ば予定して繰り返す、思い通りに打ち返されるのを確認しながら、その相手をコミュニケーション<sup>⑤</sup>可能な他者として特定している。

そのヒジに硬さや頑固さのようなものを感じるときはどうだろう。その頑固さというのも、一つの強い主体性の表れにちがいない。ただ〈相手〉の冷たさや頑固さを一方的に知覚できるけれども、その〈相手〉がこちらの気持ちを特定してくれているように思えない。そこでの調整の余地はとも限られたものなのだ。

ヒジの攻防では、お互いはヒジを対峙させながら、そこでオリジナルな関係性を見出していた。そこで自分の在りようを探るとともに、相手の状態や気持ちを特定しようとする。**Y** 人との関わりは、こうした〈対峙しあう関係〉に限られない。ここで着目するのは〈並ぶ関係〉というものである。

春の日差しの中を、誰かと一緒に公園などを散歩する状況を考えよう。なにを話すわけでもなければ、なにか目的があるわけでもない。一緒に木々を眺めながら、ヤワ<sup>5</sup>らかくなった日差しや風を感じている。そうしてしばらく歩いてみると、いつの間にかお互いの歩調もあってくる。どちらに進むのか、どこに向かおうとするのか。そこに言葉はないけれど、相手の気持ちはなんとなく伝わってくる。こちらの気持ちも伝わっているように思える。こうした場面では、お互いは〈対峙しあう〉というより、むしろ〈並んだ関係にある〉といえるだろう。

ここでのコミュニケーションはどのようなものなのか。公園の木々をめいめいに眺め、それぞれが春の日差しや風を感じているだけではない。相手の視線や身体の向きに気を配りながら、その木々をどのようなものとして感じているのか、どちらに進もうとしているのかを探ろうとする。

このとき、あまり意識することはないけれど、自らも木々に目をやりながら、ときには相手の視線の先を追いかけている。なにをしているのかといえば、相手の視線に、自らの視線を重ねているのだ。この交互に視線をおくるような仕草は「ゲイズ・オルタネーション (gaze alternation)」とか、「社会的参照 (social referencing)」と呼ばれている。

相手はどこに進もうとするのか、その視線の先にある対象(木々や春の日差し、風など)をどのようなものと感じているのか、これらを正確に把握するのは容易ではない。そこで交わす言葉もなく、手がかりも限られたものなのだ。「じゃ、どうしているの?」といえ、まさに「自分の身体に聞いてみる」という方略をとっている。これは「社会的参照」に対して、「自己参照 (self referencing)」と呼ばれるものである。自らの身体が感じていることを手がかりに、相手の気持ちを探ろうとする。あるいは「心の理論」と呼ばれるような、自分の思考の様式を当てはめながら、相手の考えを探ろうとする。

このとき相手の視線に自らの視線を重ねるように、相手の振る舞いに自分の身体を思わず重ねていることに注意したい。幼児のヨタヨタと覚束<sup>ぼくぼく</sup>ない振る舞いを目で追いかけてしまう。いまにも倒れそうな姿に思わず手を差しのべてしまう。そこに自分の身体を重ねてしまう、いわゆる「のり込

み」や「なり込み」と呼ばれる事態である。

これは普段の会話のなかでも経験する。例の（モジモジ君）の「えーと、どうなんだろう。シユミ<sup>6</sup>っていわれても……」という熟考モードに対して、「えっ？ いま、なにを考えたようにしているの……」と、相手の視線や自らの思考プロセスを手がかりに、相手の思考内容について思い巡らすことも多い。これは身体レベルでの「なり込み」というより、「心の理論」のような認知レベルでの他者理解のモードだろうか。この身体レベルでの「なり込み」による他者理解と「心の理論」に基づくような他者理解との境界はまだアイマイ<sup>7</sup>のだけれど、いずれも自分に置き換えて解釈しようとする、「自己参照」という点では共通したものなのだ。

先の「公園のなかを一緒に歩く」という場面では、もうすこし複雑なことをしている。幼児のヨタヨタした姿に対する一方的な「なり込み」とはちがいが、双方で相手の気持ちを探りあう。「相手はきつとこんな風に感じているのではないか」ということを、自らの身体を手がかりにして考える。同時に、相手も自らの身体で感じていることを手がかりに、こちらの気持ちを探ろうとする。この「相互のなり込み」によって、お互いの身体の状態も近づいていく。いつの間にか、歩調までもあつてしまう。

こうした（並ぶ関係）でのコミュニケーションは、公園のなかを一緒に歩くような場面に限られない。お母さんと子どもが一緒に絵本を眺めながら、くつろいでいるとき、その絵本に対して二人は並んでいる。その絵をどのようなものと感じているか、時折、相手の視線の先を確認しながら、自分の感じていることを手がかりに、お互いの気持ちを探りあう。

テニスのボールを打ちあうような場面でも同様だろう。ボールの物理的なスピードからは、相手の気持ちを直接には探れそうにない。けれども、相手の状態に合わせようという気持ちはある。「これくらいなら、相手はちゃんと返してくれるかな……」と加減をしながらボールを打ちだしてみる。このときも自らの力量を手がかりに、相手の力量を推し量ろうとする。そんな探りあいのなかで、相手の気持ちも伝わってくるのだ。

（岡田美智男『弱いロボット』の思考 わたし・身体・コミュニケーション）

\*コードモデル：記号から意味を読み取ろうとすること。

\*モジモジ君：筆者の研究室に在籍する学生で、問いかけに上手く答えられない生徒のあだ名。

問一 線部1〜7のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 線部A「生憎」、B「覚束ない」の本文中の意味として適当なものを次のア〜オからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。



問三 線部①「そうした情報」とありますが、どのようなものですか。最も適当なものを次のア〜オから選び、記号で答えなさい。

ア 相手の秘めている性格と、相手の現在の精神状態。

イ 自分のそのときの状態と、相手の体の状態や心情。

ウ 自分のその日の調子と、相手のプレー技術の高さ。

エ 自分の体の状態と、自分のその日のプレーの調子。

オ 自分のラケットの馴染み具合と、相手の動きの癖。

問四 X・Y にあてはまることばとして最も適当なものを次のア〜オから選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア たとえば                    イ しかし                    ウ たしかに                    エ つまり                    オ あるいは                    カ むしろ

問五 線部②「ヒジの位置取りというのはなかなか難しい」とありますが、このように言える理由として最も適当なものを次のア〜オから選び、記号で答えなさい。

ア 自分の臆病さを情けなく思いながらも、相手を優先してヒジを引いたままにしていなければならないから。

イ 相手のわずかな隙を冷静にうかがいながらも、自分の領地を守るため大胆にヒジを広げなければならないから。

ウ 相手から非難されることを恐れながら、相手に当たらないように自分のヒジを引いていなければならないから。

エ 自分の主張を押し通したことに気づきながらも、後にも引けずそのヒジを置き続けなければならないから。

オ 相手に隙を見せたことを後悔しながら、自分をいましめてヒジを縮めたままでもい続けなければならないから。

問六 線部③「コミュニケーション可能な他者」とはどのような存在ですか。最も適当なものを次のア〜オから選び、記号で答えなさい。

ア こちらからの働きかけに対して反応があり、その反応の中に意思を感じることができ存在。

イ 自分と同じレベルで物事を考え、質問に対して適切な受け答えをすることができる存在。

ウ こちらからの気持ちを正しく読み取り、それを別の誰かに正確に伝えることができる存在。

エ 余計な反応や意思表示をすることなく、思いのままに主張を投げかけることができる存在。

オ 自分が打ったボールから調子を感じ取り、最適な強さでボールを打ち返すことのできる存在。

問七 線部④「対峙し合う関係」とありますが、この関係について説明した次の文の（Ⅰ）〜（Ⅲ）に当てはまることばを本文からそれぞれ二字で探し、書き抜きなさい。

他者と出会い、その相手に対し自分の（Ⅰ）を向けたとき、相手の反応などからその人の（Ⅱ）性は感じとれるが、その過程が（Ⅲ）的に行われている関係。

問八 — 線部⑤「相手の気持ちはなんとなく伝わってくる」とありますが、その理由として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 会話をしていなくても、相手の意識が向いているところに自分も意識を向けているから。
- イ 一緒に散歩をするくらい普段から仲が良く、何も話さなくても気持ちが通じ合っているから。
- ウ 体の動きや視線の変化を探ることで、相手の行動パターンを読み取ることができるから。
- エ 歩調を合わせることで感覚を共有し、相手と全く同じ自然を感じることができているから。
- オ 自分の感じていることには関心を置かず、相手の意識に気を配ることに集中しているから。

問九 — 線部⑥「いまにも倒れそうな姿に思わず手を差しのべてしまう」とはどういうことですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 幼児のヨタヨタとした体の動きを追いかけていると、その可愛さから手を引いてやりたくなるということ。
- イ 幼児のヨタヨタとした体の動きを観察しているうちに、自分が幼児の保護者であると感ずるということ。
- ウ 幼児のヨタヨタとした体の動きを自分の体に置き換えて体感し、無意識に危険を察知するということ。
- エ 幼児のヨタヨタとした体の動きを自分の体で再現することで、転んでしまう恐怖を認識するということ。
- オ 幼児のヨタヨタとした体の動きを見て自分の記憶が重なり、幼児と一体化したように感じるということ。

問十 — 線部⑦「〈並ぶ関係〉でのコミュニケーション」とはどういうことですか。五十字以内で答えなさい。(句読点、記号は字数に数えます。)

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

三 五年前、事故に巻き込まれ半身に障害を負った「地蔵さん」(恵三)は妻の「美也子さん」と離婚する。その後、母である「ヤスバあちゃん」と二人で暮らしていたところに「ぼく」と「夏美」が訪れて親しくなるが、ある日、突然の病気で倒れ、集中治療室に入ることになる。

ヤスバあちゃんは、その看護婦に小さくおジギ<sup>1</sup>をすると、地蔵さんにぼつりと語りかけた。

「恵三やあ、よかつたねえ、ほれ、美也子さんが来てくれたよう……」

ぼくは、返事をするはずのない地蔵さんの口元を見た。あんぐりと開いた口のなかに、昨日と同じトウメイ<sup>2</sup>なチューブが差し込まれている。

美也子さんは恐る恐るといった様子でベッドの柵に手をかけて、静かに地蔵さんの顔を覗き込んだ。

「ほれ、せつかく美也子さんが来てくれたんだよう、恵三、目を開けてみなよう……」

ピ、ピ、ピ、と、心拍<sup>①</sup>を伝える電子音が無感情に響き、足元からは加圧ベルトから空気がモれるプシュー<sup>3</sup>という音が聞こえていた。

「恵三……。美也子さん、いま、幸せだったよう。よかつたねえ……」

ヤスバあちゃんのこの言葉に、美也子さんは「うっ……」と声にならない声ももらして、むせび泣きはじめた。そして、地蔵さんの胸のあたりに向かって「ごめんねえ……」と小声で言いながら、小刻みにしゃくりあげた。

横にいた夏美が、ぎゅつとぼくの手を握った。振り向いて見なくても分かる。夏美は、もらい泣きをしているに違いない。

美也子さんの肩は、小さく震え続け、しずくは、とめどなく流れ落ちた。考えてみれば、そもそも美也子さんは地蔵さんのことを嫌いになつて別れたわけではないのだ。地蔵さんを愛して結婚し、地蔵さんとの間に愛する子供が生まれ、そして、地蔵さんを愛しているままに、一方的に離別を言い渡されたのだ。それが、たとえ美也子さんと公英<sup>\*まきひ</sup>さんの幸せを想った上での地蔵さんの決断だったとはいえ、結果的にフラれたのは美也子さんであることには違いない。しかも、手みやげに持たされたものは、障害者となった夫を見捨ててしまったという「罪悪感」だ。後ろ髪を強く引かれながら、泣く泣く地蔵さんと別れ、美也子さんは実家に戻って新しい人生を生き——そして、いま彼女が別の幸せを手に行っているのなら、地蔵さんもホンモウ<sup>4</sup>だろう。

しかし、三五年を経たいまでも、美也子さんの中には「罪悪感」が居座り続け、そして、ヤスバあちゃんの気持ちのなかには、ぬぐい切れない怨念がへばりついているのだ。

悪い人は誰もいないのに、誰もが傷を負っている——。

それを思うと、自己犠牲によって美也子さんと息子を救おうとした地蔵さんの離婚の決断すらも、必ずしも百点満点だったとは言えないことなるのではないか。いや、そもそも、完璧な正解など無いのかも知れない。人はきつと、その人生におけるすべての<sup>5</sup>ブンキテン<sup>5</sup>において、少しでも良さそうな選択肢を選び続けていくしかないのだ。そして、それだけが、唯一の誠実な生き方なのではないだろうか。

美也子さんは、また「ごめんねえ……」とつぶやいた。そして、泣きながら、地蔵さんの血色のいい頬に触れた。

ぼくは、握った夏美の手の温度を意識した。

ちよつと<sup>6</sup>ブンキンシン<sup>6</sup>かな、とも思っただけれど、その手を小さく前後に振った。

幸せってさ、単純にさ、こういうことかも——。

夏美の言葉を思い出す。

空を飛んでるだけで幸せ——。

トンボがそうなら、ぼくらだって、きつと……。

夏美を見た。泣き笑いで、握った手を振るぼくを見上げていた。そして、そのとき、ヤスバあちゃんが口を開いたのだ。

「美也子さんよう、もう、謝らなくていいよう」

「で、でも……。わたし……」

美也子さんは、まだ地蔵さんの上下する胸に視線を下ろしながら、しゃくりあげている。「そんなに、謝るくれえならよう……」

「……」

「<sup>A</sup>どうして、あんどき……、あんたはよう——」

「<sup>B</sup>ぼくがハツとした刹那——。」

「それは違うよっ」

「ぼくのとなりから、<sup>C</sup>凜とした声があがった。

ヤスバあちゃんは、口を閉じた。夏美の発した声が、ヤスバあちゃんの口に、ぎりぎりのところでブレーキをかけたのだった。

ヤスバあちゃんと美也子さんが、こちらを振り返った。

「<sup>D</sup>ぼくらの振っていた手は止まり、その代わりに夏美はいつそう強くぼくの手を握りしめた。」

「それは……違うんだよ、ヤスバあちゃん」

夏美は震える息を大きく吸って、そして、自分を落ち着かせるようにゆっくりと吐きだした。

「美也子さんはね、逃げたんじやないんだよ。地蔵さんに言われて、無理矢理、離別させられたんだよ……。本当は、離婚なんて、したくなかったんだよ……」

ヤスバあちゃんが、ゆっくりとした動作で、となりの美也子さんを見上げた。でも、美也子さんはうつむいて、ハンカチで顔をオオいながら声を押し殺してむせび泣くばかりだった。

「地蔵さん……、わたしたちにね……教えてくれたの。恵三っていう名前の意味。三つの恵みの話、してくれたんだよ」

夏美も泣きながら、必死にしゃべった。ヤスバあちゃんの目からも、みるみるしずくがあふれ出す。

「三つ目のね……ハンリョと一緒に、子供の幸せな姿を見る喜び、あるでしょ。自分がいると、美也子さんも子供も不幸にしちゃうって、地蔵さんは思っ……三つ目の恵みを、美也子さんから奪っちゃだめだって……思っ……それでね、地蔵さんは、自分から離婚を申し出たの。だから……、だからね……」

そこで夏美は声をあげて泣いた。だから、に続くバトンはぼくが受け取った。

「だから、誰も、悪くないんです」

ぼくは握っていた夏美の手をそっと放して、小さなショルダーバッグのなかから、一枚の写真を取り出した。地蔵さんに複写を頼まれていた、色褪せたぼろぼろの写真——生まれたばかりの公英さんを抱いた美也子さんの写真だった。

「これ……」

ヤスバあちゃんに、その写真を差し出した。

そっと受け取ったヤスバあちゃんは、セピア色の写真をじっと見たあとに、涙でくしゃくしゃになった顔で、ぼくを見上げた。

「裏を、見てください」

ヤスバあちゃんは、写真を裏返した。古い万年筆で書かれた、紺色の五文字が現れる。

「地蔵さん、子供の頃は、<sup>E</sup>やつぱり淋しかったんだそうです。でも、寝るときにいつも、ヤスバあちゃんが、恵三、母ちゃんの子に生まれてきてくれて、ほんとに、ありがとねえ——って言ってくれたから、心から救われていたって……」

両手で写真を持ったまま、ヤスバあちゃんもしゃくりあげた。ぼくは、そのまま続けた。

「地蔵さんが、美也子さんと離婚して、いちばん心残りだったのは、息子の公英さんに、ヤスバあちゃんにもらったのと同じ言葉をかけてやれなかったことだって……。生まれてきてくれてありがとねって言っ……やれなかったことを、いちばん後悔してるって……地蔵さん、そう言っていました。」

だから、その写真の裏に書かれた、ありがと、は、ヤスバあちゃんと同じ気持ちで書いた、ありがと、なんです」

ぼくは、しゃべりながら自分の内側に熱が生じてくるのを感じていた。それでも構わずしゃべり続けた。

「だから、きつと、誰も悪くなくて……。みんな、ただ、すごく優しいだけで……」

目の奥にまで熱が生じて、もうぼくの理性だけでは、その熱はコントロールできなくなりそうだった。

ヤスバあちゃんは、泣きながら、うん、うん、と何度も頷くと、<sup>F</sup>美也子さんに向かつて「ごめんよう。ごめんよう」と言いはじめた。美也子さんは首を左右に振りながら、涙でいっぱい優しい目でヤスバあちゃんを見下ろした。

それから、ヤスバあちゃんは、眠っている地蔵さんにゆっくりと振り返った。

そして、包帯の上から、息子のおでこを慈しむようになではじめたのだった。

「この子を、産んでよう……」

ヤスバあちゃんは、しゃくりあげていた息を整えて、深く吸い込んだ。そして、吐き出した空気を、想いに変えた。

「ほんとに、よかったよう……。恵三、<sup>G</sup>……」恵み深い、母親の声——。

その瞬間、<sup>H</sup>ぼくのなかで何かが決壊した。喉から、声が出ていた。地蔵さんが倒れてから、ぼくは、はじめて泣いたのだった。

〔森沢明夫『夏美のホタル』〕

\*公英さん…地蔵さんと美也子さんとの間に生まれている子ども。

\*やつぱり淋しかった…地蔵さんの父は、ヤスバあちゃんが地蔵さんを身もついている時に結核で亡くなった。

問一 線部1～8のカタカナを漢字に直しなさい。

問二——線部①「心拍を伝える電子音が無感情に響き」とありますが、この表現が持つ効果として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 人の温かみがまったく感じられない機械の音だけが聞こえ、医療の現場が感情から切り離されたものであるということを強調している。
- イ 語りかけに対する返事ではなく無機質な機器の音が聞こえることで、会話での感情のやり取りが二度とできない悲しみが表されている。
- ウ 機器の鳴る一定のリズムから地蔵さんの容体は今と比較的安定しているとわかるが、一歩ずつ死が近づいていることを暗に示している。
- エ 機器から聞こえてくる単調な音があまりにも冷たく響き渡り、回復へのかすかな期待すら奪ってしまう病室の重い空気が表されている。
- オ 地蔵さんは確かに生きているのに話しかけても反応がなく、無機質に機械の音だけが聞こえてくることでやるせない強さが強調されている。

問三——線部②「地蔵さんの胸のあたりに向かって『ごめんねえ……』と小声で言いながら、小刻みにしゃくりあげた」とありますが、このときの美也子さんについて述べた次の文の（Ⅰ）～（Ⅲ）に当てはまることを本文からそれぞれ三字で探し、書き抜きなさい。

美也子さんと公英さんの幸せを願い、より良い（Ⅰ）を選ぶことで誠実な生き方をしようとした地蔵さんの決断によって、（Ⅱ）を引かれながら離婚を受け入れたものの、結果として、障害を負った夫を見捨ててしまったという（Ⅲ）を抱いてしまっている。

問四——線部Aから線部Bまでのヤスバあちゃんの心情の変化を表したものととして最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 疑問 ↓ 理解 ↓ 喜び ↓ 感謝      イ 恨み ↓ 驚き ↓ 理解 ↓ 懺悔
- エ 恨み ↓ 疑問 ↓ 理解 ↓ 感謝      オ 疑念 ↓ 恨み ↓ 後悔 ↓ 納得

問五——線部③「ハッとした」とありますが、このときの「ぼく」の心情を説明したものととして最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア ヤスバあちゃんに過去の話をされると、美也子さんが怒りだしてしまっているのではないかと咄嗟に思った。
- イ ヤスバあちゃんの口調が厳しいものであると感じ、この話し方では美也子さんが怯えてしまうと思った。
- ウ ヤスバあちゃんのことを聞いて、物思いにふけていた状態から突然目の前の現実を引き戻された。
- エ ヤスバあちゃんにこれ以上のことを言わせてしまうと、さらにみんなが傷つくことになると思った。
- オ ヤスバあちゃんの言おうとしていることが、今まさに自分が話そうとしていたことだったので驚いた。

問六——線部④「夏美はいつそう強くぼくの手を握りしめた」とありますが、このときの夏美の心情を説明したものととして最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア ことを発する勇気をふりしぼり、何とかしてヤスバあちゃんに過去の真実を伝えなければならぬと意を決している。
- イ この状況で自分が発言をするのはためらわれることだが、何とかしてヤスバあちゃんの気持ちをなだめようとしている。
- ウ ヤスバあちゃんと美也子さんに同時に見つめられ、突然自分が注目を集めたことに対する恐怖心に打ち勝とうとしている。
- エ ヤスバあちゃんのことばに美也子さんが反論せず、関係のない自分が事情を説明しなければならぬことにいらだっている。
- オ 本当のことをヤスバあちゃんに伝えても信じてもらえないかわからないが、それでも話すべきだと自分に言い聞かせている。

問七——本文から読み取れる夏美の人物像として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア どんなどきでも自分の意見を譲らない気の強い人物。      イ 真面目さゆえに間違いが許せない正義感の強い人物。
- ウ 自分の感情に偽りのない真っ直ぐな人物。      エ いつも明るく振る舞っている楽天的な人物。
- オ 何事にも動じず対応できる冷静沈着な人物。

問八——線部⑤「自分の内側に熱が生じてくる」とありますが、どういうことですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 地蔵さんの家族に対して抱いている後悔の気持ちを思うと、かわいそうでいたたまれないという気持ちになっていること。
- イ 地蔵さんが抱いていた孤独を想像するうちに胸が苦しくなり、その孤独を癒した母という存在の偉大さを感じていること。
- ウ 地蔵さんが家族に対して抱いていた思いを説明するうちに改めて心打たれ、抑えきれない思いがこみあげてきていること。
- エ 地蔵さんのヤスバあちゃんに対する感謝の気持ちを説明するうちに、自分もヤスバあちゃんに感謝するようになったこと。
- オ 地蔵さんがヤスバあちゃんと同じ気持ちを抱いていたということから、親から子に心が受け継がれていると感動したということ。

問九——⑥に当てはまることを本文から十五字以内で探し、書き抜きなさい。（句読点、記号は字数に数えます。）

- 問十——線部⑦「ぼくのなかで何かが決壊した」とありますが、このときの「ぼく」の説明として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。
- ア 我が子を愛しているヤスバあちゃんの姿を目の前にし、その深い愛情に包まれて自分も不思議と優しい気持ちになっている。
- イ すべてを受け入れ我が子に向き合っているヤスバあちゃんの深い愛情に触れて、自分の感情があふれ出してしまっている。
- ウ 自分の話したことがヤスバあちゃんに受け入れられたことを実感し、地蔵さんの過去の苦しみが報われたように感じている。
- エ ヤスバあちゃんにすべてをきちんと伝えられるか不安に思っていたが、上手に話げできたことで緊張の糸がほぐれている。
- オ ヤスバあちゃんがすべてを受け入れ我が子を思う姿に触れて、強い絆で結ばれた親子という関係性を羨ましく思っている。

- 問十一——本文の表現について述べたものとして最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。
- ア 多く用いられている「……」や「——」という表記が、その場面に流れている沈黙や間、人物の心情を表現している。
- イ 短文が多いことで物語がテンポよく展開し、全体を通して登場人物が感じている緊迫した雰囲気表現されている。
- ウ 複数の語り手の視点から登場人物の行動を細かく描写することで、それぞれの人物の微妙な心情を読者に伝えている。
- エ 夏美の台詞の中に句読点が多用されていることで、夏美が自分の発することばをかみしめている様子が表現されている。
- オ ヤスバあちゃんの話し方を「くよう」「くねえ」という表記にすることで、ヤスバあちゃんの優しい性格を表現している。

問一	6 シュミ	1 ケンメイ
	7 アイマイ	2 ハイリヨ
問二	さ	3 キュウクツ
		4 スス
		5 ヤワ
らかく		

問二 A	<input type="text"/>
B	<input type="text"/>
問三	<input type="text"/>
問四 X	<input type="text"/>
Y	<input type="text"/>
問五	<input type="text"/>
問六	<input type="text"/>
問七 I	<input type="text"/>
II	<input type="text"/>
III	<input type="text"/>
問八	<input type="text"/>
問九	<input type="text"/>

問十	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>

問一	6 お	1 ジギ
	フキンシン	
	7 オオ	2 トウメイ
	い	な
	8 ハンリヨ	3 モ
		れる
		4 ホンモウ
		5 ブンキテン

問二	<input type="text"/>
問三 I	<input type="text"/>
II	<input type="text"/>
III	<input type="text"/>
問四	<input type="text"/>
問五	<input type="text"/>
問六	<input type="text"/>
問七	<input type="text"/>
問八	<input type="text"/>
問九	<input type="text"/>
問十	<input type="text"/>
問十一	<input type="text"/>

受験番号
<input type="text"/>
得点
<input type="text"/>

1	ケンメイ	懸命	6	シユミ	趣味
2	ハイリヨ	配慮	7	アイマイ	曖昧
3	キユウクツ	窮屈	さ		
4	ヌス	盗	んで		
5	ヤワ	柔	らかく		

- 問二 A  B
- 問三
- 問四 X  Y
- 問五
- 問六
- 問七 I  II  III  方
- 問八
- 問九

相	手	の	視	線	や	振	る	舞	い
に	自	分	の	身	体	を	重	ね	、
手	が	の	思	考	プ	ロ	セ	ス	を
ち	手	自	に	合	互	い	に	気	持
を	が	ら	り	探	り	り	こ	と	。

1	ジギ	お	辞儀	6	フキンシン	不謹慎
2	トウメイ		透明	7	オオ	覆
3	モ		漏	8	ハンリヨ	伴侶
4	ホンモウ		本望			
5	ブンキテン		分岐点			

- 問二
- 問三 I  II  III
- 問三 II  III
- 問三 III  III

- 問四
- 問五
- 問六
- 問七
- 問八

- 問九
- |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 生 | ま | れ | て | き | て | く | れ | て | あ |
| り | が | と | ね |   |   |   |   |   |   |
- 問十
- 問十一

受験番号
得点